

令和 2 年 5 月 20 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02852

研究課題名(和文)カタカナ語の語彙知識に関する研究 意図的学習のための教材開発をめざして

研究課題名(英文) A study on vocabulary knowledge of katakana words for development of teaching materials

研究代表者

山下 直子 (Yamashita, Naoko)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：30314892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、カタカナ語学習の教材開発をめざして、カタカナ語と類義の和語・漢語との使い分けに関する調査を行った。語彙知識の「使用」に焦点をあて、基本的な語彙として定着しつつあるカタカナ語がどのような文脈で使われるのか、また、どのような語と共起するのかを探った。その結果、日本語学習者も自分なりのルールに基づきカタカナ語とその類義語を使い分けようとしているが、日本語母語話者の結果とは違いやずれがみられ使い分けが難しいことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの日本語学習者がカタカナ語を苦手とすることは認識されていながら、教育現場で十分な指導がされているとはいえない。その一因として、教師が参考とする基礎資料が不足し、教材も十分でないことがあげられる。本研究は、カタカナ語の語彙習得研究であり、研究成果を指導の実践へ応用する試みである。基本的な語彙として定着する語も生じる中で、日本語教育における語彙教育としてカタカナ語を取り上げる意義は大きいと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate the distribution of katakana words and their synonyms in wago and/or kango to develop teaching materials for Japanese language learners. Focusing on “use” of vocabulary knowledge, we analyzed the contexts and collocations of katakana words by native speakers of Japanese and Japanese language learners. The result shows that the learners and native speakers use katakana words according to different rules. It became evident that the learners have difficulty acquiring native-like intuition about when to use katakana words vs. their synonyms.

研究分野：日本語教育 第二言語習得

キーワード：日本語教育 カタカナ語 外来語 類義語 語彙 意図的学習 第二言語習得

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

カタカナ語は、日本語学習者にとって学習が難しいものの一つであり、カタカナ語の習得にはさまざまな困難がともなう(石綿 2001 など)。しかし、多くの学習者がカタカナ語を苦手とすることは認識されているが、漢字学習等に比べると先行研究は多いとはいえない。

第二言語の語彙学習は、Nation (2001) などによると、語彙に特化した意図的学習と読解等の活動で付随的に学ぶ偶発的学習に分類され、ともに重要であるとされている。日本語教育においても、カタカナ語の語彙指導の必要性は指摘されているが、実際には意図的に語彙を学ぶ機会は少なく、教育現場で十分な指導がされているとはいえないのが現状である(中山・陣内・桐生・三宅 2008)。今後、効果的なカタカナ語の学習や指導を検討するため、指導の基礎資料となる調査研究を行うことが重要であると考えられる。

そこで、Nation (2001) が分類した三つの語彙知識「語形」「意味」「使用」のうち、カタカナ語の「語形」(表記)と「意味」に焦点をあて、山下・畑・轟木 (2015) 等で調査を行ってきたが、多くの学習者からカタカナ語の「使用」の難しさへの言及があり、検討が必要であるという課題が残された。

従来、カタカナ語は周辺的な存在とされてきたが、金 (2011) などで指摘されているように、生活の近代化により使用が進んだ「テレビ」等の具体的な名詞だけでなく抽象的な語も増え、その一部は基本語彙として定着しつつある。カタカナ語がこれまで使われていた類義語に代わって使用される、あるいは類義語と共存するようになっているのである。これらの語を日本語母語話者は使用に関する語彙知識によって使い分けているが、具体的にどのように使い分けるかは辞書に記述もなく、学習者にとっては学習上の大きな困難点となっている。

なお、カタカナで表記されるものは外来語が一般的であるが、和製外来語や非外来語のカタカナ表記も増えており、それらを含めた指導が必要になると考え、本研究ではカタカナ語という語を用いる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、カタカナ語の意図的学習のための教材開発をめざして、カタカナ語の語彙知識の「使用」と「意味」の側面に焦点をあてて調査を行うことである。まず、カタカナ語とその類義の和語や漢語との使い分けに関する調査を行い、以下の点を明らかにすることをめざす。

- (1) カタカナ語がどのような文脈で使われるのか(使用の範囲)を明らかにする。
- (2) カタカナ語がどのような語と共起するのか(使用のコロケーション)を明らかにする。
- (3) 上記の調査を日本語学習者と日本語母語話者に行った結果を比較し、学習上で注意すべき点を探る。

また、教材開発の基礎資料として、日本語学習者がどのようなカタカナ語を学ぶべきかを検討するため、カタカナ語の使用の実態を調査する。

3. 研究の方法

(1) 使い分けに関する質問紙調査

基本的な語彙として定着しつつあるカタカナ語と意味の類似した漢語あるいは和語の使い分けに関する質問紙調査を行った。類義語は一対一対応とは限らず、複数の語の間に類義関係を持つものもあるが、類義語の使い分けを調査した先行研究を参考にして、本研究ではペアでの比較を行った。質問項目は、カタカナ語とその類義語のペアを提示して、思いつく文をそれぞれ書いてもらう文産出法の問いと、両者の違いや気づいたことについての自由記述である。

の質問項目で産出された文の中で、カタカナ語・類義語と共起する語をそれぞれ抽出した。どのような語とともに使用されているのかを分析し、『日本国語大辞典』(2002)等の辞書に記述されたカタカナ語と類義語の語義を用いて、産出文を意味的に分類した。また、カタカナ語や類義語がどのような構文で用いられているかという文法的な側面も検討した。さらに、の使い分けに関する自由記述を分析した。

調査対象者は、日本語学習者 67 名で、日本の大学や日本語学校で学ぶ外国人留学生である。日本語レベルは中上級で日本語能力試験の N2 から N1 程度である。また、日本語母語話者は 110 名である。

調査に用いた語彙は、広範囲・高頻度に用いられ定着しつつあると考えられるカタカナ語とその類義語である。澤田 (1993) にあげられた日本語教育のための基本外来語で、和語または漢語と使い分けられている語のうち、「スル」をつけて動詞化する語(サ変動詞)を選択した。さらに、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のコーパスによって、使われる頻度の高い語を選んだ。それらのカタカナ語の類義語を複数の類義語辞典から選びだし、カタカナ語と類義の和語または漢語との 14 ペア、28 語を調査に用いた。まず、日本語母語話者に調査を行い、その結果、一定の使用基準がみられた 12 ペア 24 語に関して、日本語学習者にも同様の質問紙調査を行った。

(2) カタカナ語の使用実態に関する調査

日本の大学や大学院で学ぶ外国人留学生を対象とした効果的なカタカナ語学習を検討するために、全学共通科目のシラバスでどのようなカタカナ語が使われているか調査を行った。また、日本で生活する日本語学習者がどのようなカタカナ語を学ぶべきかを検討するため、地域日本

語教室等で使用されている日本語教科書等から生活に必要なカタカナ語を分析した。

4. 研究成果

(1) 日本語母語話者の使い分けに関する調査

山下・畑・轟木(2018)では、日本語母語話者を対象者としてカタカナ語と類義語の使い分けに関して質問紙調査を行い、母語話者がカタカナ語とその類義の漢語あるいは和語を、どのように使い分けしているのかを明らかにすることをめざした。

その結果、産出文で共起する語が割れ自由記述でも意見が分かれるなど、類義語との使い分けに個人差やゆれのみられる語が2ペア(「テストする・試験する」と「ストップする・停止する」)あった。一方で、その他の12ペアでは、日本語母語話者が使い分けに一定の基準を持つことが明らかになった。表1に示したように、12のペアには三つの使い分けの基準があると考えられる。基準は、「カタカナ語に類義語にはないニュアンスが付加されている」、「カタカナ語のほうが類義語より多義的である」、「カタカナ語が特定の使用に限られ類義語と役割分担している」である。の「ニュアンスの付加」では、例えば、「カットする」はプラス評価につながるイメージがあり、「失恋して髪を切る」の「切る」との置きかえが難しいと認識されている。

の「多義的」では、「カバーする」は「補う」以外にも「覆う」「全体に力が及ぶ」「カバー・バージョン」など意味の範囲が広く、共起する語も文脈もさまざまであった。「役割分担」では、「トレーニングする」が主にスポーツの領域で使われ、「練習する」等他の類義語と役割分担している。これらの基準は、先行研究でカタカナ語が取り入れられる背景として指摘されている点とも重なっている。

表1. カタカナ語と類義語の使い分けの基準

使い分けの基準	カタカナ語と類義語のペア
カタカナ語にニュアンスが付加	カットする・切る, サインする・署名する, スタートする・開始する, プリントする・印刷する, リ(レ)ポートする・報告する
カタカナ語のほうが多義的	カバーする・補う, サービスする・奉仕する, チェックする・点検する, リードする・率いる
カタカナ語の使用に限られ役割分担	アピールする・訴える, トレーニングする・練習する, リラックスする・くつろぐ

(2) 日本語学習者の使い分けに関する調査

上記の調査で日本語母語話者に一定の使用基準がみられた12ペア24語に関して、山下・畑(2019)では、カタカナ語とその類義語を日本語学習者がどのように使い分けしているかを明らかにするため、学習者にも同様の質問紙調査を行った。その結果、日本語学習者も自分なりのルールに基づきカタカナ語と類義の和語や漢語を使い分けようとしており、日本語母語話者と同じような語と共起する傾向のみられる産出文もあるものの、母語話者の使い分けとは違いやずれがみられ、使い分けが難しいことが明らかになった。

例えば、使い分けの基準の「カットする・切る」のペアでは、(1)の調査結果でも述べたように、「髪をカットするのほうが切り整える・改善するという意味がある」という自由記述があるように、「カットする」には「切る」ことがプラス評価につながるイメージを日本語母語話者は持っていると考えられる。しかし、このようなコメントは日本語学習者にはなく、母語話者の持つ語のイメージをとらえられていないことがわかった。日本語学習者の産出文と自由記述をあわせてみると、「この映像をカットする」「かみを切る」という母語話者にもみられる文を産出した学習者が、自由記述のコメントにおいては、「カットするのほうが、切るより幅広く使える」と母語話者とは相反するコメントをしている。産出文は似た傾向であっても、使い分けの基準が必ずしも同様であるとは限らないといえよう。また、「明日、髪を切る。」「美容室で髪をカットする。」と産出し、「カットは美容室でしか使えないイメージ」と記述しているように、「カットする」を美容室という場所に限定して、学習者が独自に使い分けしている例もみられた。

使い分けの基準のカタカナ語のほうが類義語より多義的である「カバーする・補う」のペアでも、日本語学習者の結果は母語話者と違いがみられた。「カバー」は、『広辞苑』(2018)等によると、「補う」と置き換えが可能な「損失・不足・失敗などを補うこと。」の他にも、「物の表面を覆う。」「スポーツで、味方の選手の動きを助けること。」、比喩的におおうことから「範囲に入れること。」や、すでに発表されている楽曲を演奏する「カバー・バージョンの略。」など、幅広い意味を持つ。日本語母語話者は、産出文でも多くの語と共起しさまざまな意味で使っているが、学習者では、「ミス」「欠点」などを「補う」と「本」「スマホ」などを「覆う」の意味に限定され、共起する語も限られており、意味の広がりは見られない。自由記述の回答も2割と少なく、日本語母語話者のように「カバーする」の持つ多義性には言及はされていない。

また、自由記述で「カバーのほうが軽い感じ(使い方の軽さ)」と、「軽さ」というカタカナ語の全般的なイメージはとらえていても、「メイクをカバーする。」「ふとんを補う。」という文を産

出し、使い分けの記述と産出文との関連が不明瞭である回答もみられた。さらに、日本語母語話者とは異なる使い分けもみられた。自由記述で、「カバーする」が「隠す」「外から保護する」で、「補う」は「補充する」という意味で使い分けるといふ学習者は、「ニキビをカバーする。」「食料を補う。」あるいは「先の話、カバーしてくれてありがとう。」「明日の会議、必要なものを補ってください。」という文を産出している。「物の時カバー、さわれないものに補うを使う」と記述した学習者の産出文は「本をカバーする。」「相手のミスを補う。」であった。日本語母語話者の結果にみられたようなカタカナ語のほうが意味に広がりがあり、さまざまな語とより自由に共起し、複数の和語・漢語と対応しているという点が学習者にはとらえられていないと思われる。

使い分け基準の「リラックスする・くつろぐ」では、緊張をとりゆったりした気分になる点では共通しているが、カタカナ語が特定の使用に限られ類義語と役割分担しており、言い換えが必ずしもできるとはいえない。日本語学習者の産出した文でも、「リラックスする」は「風呂で」「家で」などの「ある場所 でリラックスする」より、「音楽を聞いて」や「お茶を飲んで」などの「何か をしてリラックスする」が多い点は日本語母語話者と同じ傾向である。しかし、どのような場面で使っているのかという文脈がわかりにくい産出文が多くみられた。また、類義語の「くつろぐ」は産出文の無回答が6割を超えて調査語彙の中でも最も多い。産出した文も誤用が多く、違いに関する自由記述も少なかった。「聞いたことがない」という自由記述もあったように、日本語学習者にとって日常であまり使わない馴染みのない語で難易度が高く、意味はわかかっていても文を作ることは困難であったと思われる。このように、類義の和語や漢語のほうの難易度が高く馴染みもないペアでは、両者を使い分けるのではなく、「くつろぐ」を使うべき文脈でも「リラックスする」を使うといった、従来、学習者にとって難しいと言われるカタカナ語のほうをむしろ使用する傾向があるのかもしれないが、この点に関しては今後の検証が必要である。

(3) カタカナ語の使用実態に関する調査

外国人留学生と外国人生活者という異なるタイプの日本語学習者を対象者としたカタカナ語教材の開発に向けて、カタカナ語の使用実態に関する調査を行った。西崎・平田・山下(2019)では、主として大学1年次の学生が受講する全学共通科目のシラバスでどのようなカタカナ語が使われているのかを調査した。その結果、学問基礎科目のシラバスよりも主題科目のシラバスには、頻度・種類ともに多くのカタカナ語が出現することが明らかになった。また、シラバスで使われるカタカナ語は難易度が高く、多くのシラバスに広範囲に出現する語は、大学の仕組みや授業の形態・手法などに関するカタカナ語であることが分かった。

また、平田・山下(2020)では、日本で生活する日本語学習者が円滑な社会生活を送るために必要となるカタカナ語の選定を検討した。地域日本語教室で使用されている日本語教科書と学習者が生活の中で目にする画像等から学ぶべきカタカナ語を抽出した。それらのカタカナ語を分析した結果、約8割の語が旧日本語能力試験2級、1級、級外に相当する難易度の高い語であることや、BCCWJコーパスにおける出現頻度で高頻度使用されている語でも、日本語学習者にとっては難易度の高いものが含まれていることが明らかになった。

(4) まとめと今後の課題

以上のように、カタカナ語の意図的学習のための教材開発をめざして、カタカナ語の語彙知識の「使用」と「意味」の側面に焦点をあてたカタカナ語とその類義語の使い分けに関する調査とカタカナ語の使用実態に関する調査を行った。しかし、今回の使い分けに関する調査の調査語彙は限られた語であり、文産出法と違いの自由記述という調査方法も学習者にとっては負担が大きく、語彙知識の「使用」はいまだ明らかになっていない点が多い。今後は、調査方法を工夫し、さらに多くの語に調査を行うことが必要である。日本語学習者がカタカナ語について学ぶ機会があまりなく、帰納的に自らルールを見出していくほかない現状である。調査結果をもとに教材を試作し、その効果を検証して、個々の語の丸暗記だけではない効果的なカタカナ語彙の学習を検討することを今後の課題としたい。

<引用文献>

- 石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 金愛蘭(2011)『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』大阪大学日本語学講座
- 澤田田津子(1993)『日本語教育のための基本外来語について』『奈良教育大学紀要』42(1), 225-239.
- 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子(2008)『日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方』『日本語教育』138, 83-91.
- 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子(2015)『カタカナ語の聞き取りテストとカタカナ語に関する意識調査 - 韓国語・タイ語・中国語母語話者の場合 - 』『比較文化研究』119, 81-90.
- Nation I.S.P. (2001) Learning vocabulary in another language. Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 平田史織・山下直子	4. 巻 第2号
2. 論文標題 外国人生活者のための基本カタカナ語彙について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山下直子・畑ゆかり	4. 巻 vol.32
2. 論文標題 日本語学習者のカタカナ語と類義語の使い分け-産出文と自由記述の分析から-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 90-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 西崎紗彩・平田史織・山下直子	4. 巻 第151号
2. 論文標題 大学のシラバスにみるカタカナ語 - 全学共通教育の主題科目と学問基礎科目の分析から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告 部	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子	4. 巻 149
2. 論文標題 日本語母語話者のカタカナ語と類義語の使い分け - カタカナ語とその類義の和語・漢語の調査から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告第 部	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山下直子・畑ゆかり
2. 発表標題 日本語学習者のカタカナ語と類義語の使い分け：質問紙調査の結果から
3. 学会等名 第32回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山下直子・畑ゆかり
2. 発表標題 カタカナ語とその類義語の使い分け - 日本語学習者と母語話者に対する調査の比較から -
3. 学会等名 CAJLE2018（カナダ日本語教育振興会）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	轟木 靖子 (Todoroki Yasuko) (30271084)	香川大学・教育学部・教授 (16201)	
研究協力者	畑 ゆかり (Hata Yukari)	穴吹ビジネスカレッジ・日本語学科	
研究協力者	スニーラット ニャンジャローン スック (Suneerat Neancharoensuk)	タマサート大学	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	平田 史織 (Hirata Shiori)	東京大学日本語教育センター非常勤講師	
研究協力者	西崎 紗彩 (Nishizaki Saaya)	香川大学大学院修了生	